



子どもの本から

父の記憶を集めた物語

皆川美恵子

一九〇〇年、あるユダヤ人家族が迫害を逃れるために、帝政ロシアからアメリカ合衆国に渡りました。カナダ国境に近いミネソタ州ダールズで、家族は生活を開始していきますが、一九一八年、死者を数多く出しながらインフルエンザが猛威をふるって大流行します。五人の子どもを抱えた夫婦は、マー

ベンという一人の男の子だけでも生き延びさせ、新天地で根づいて行ってほしいと、ある決断をします。

十歳のマーベンを、インフルエンザが伝染しようもないような、森林が果てしなく続く北の地へ避難させたのです。父の友人が木材の伐採の仕事をして

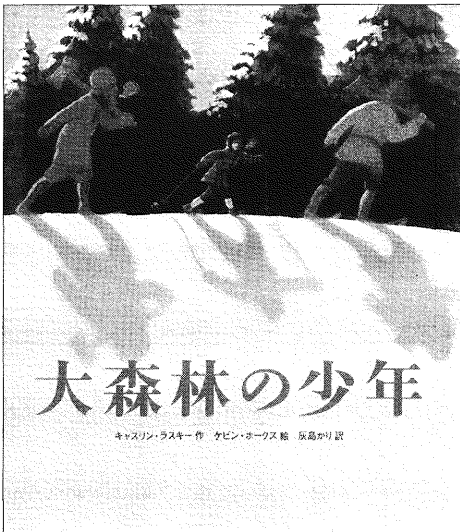
いました。その伐採現場へ、マーベンを送り込んだのです。それもマーベンがある仕事をするために。一体、十歳の子どもが何の仕事ができるというのでしょうか。マーベンが計算が得意ということを知っている父は、帳簿係の仕事ができると判断したのでした。

マーベンは母親に、父親の古いオーバーを仕立て直してもらい、裏にはビーバーの毛皮をつけてもらいます。また、耳あてのついた帽子も作ってもらいました。別れの駅でマーベンは、父親から六歳の時にプレゼントされた、父手作りのスキーを手渡されます。大森林へと向かうこれからの旅は、汽車に五時間乗り、到着した駅からはさらに八キロの道を、スキーで滑って行かなければならないからです。

地平線に森の黒い筋が見えるだけの、まっ白い世界に一人降り立ち、マーベンはスキーで森を目指します。星が輝き出す夕暮れ時、やっと伐採現場にたどり着くことができました。マーベンの仕事は、き

こり達が伐った木材の伝票を整理して帳簿につけることでした。そしてもうひとつ、朝寝坊をしている、きこりのジャン・ルイを起こすことでした。カナダから木を伐るために来ているきこり達は、フラ

◀ 『大森林の少年』 キャスリン・ラスキー作
ケビン・ホークス絵 灰島かり訳
あすなろ書房 一九九九年





▲「だれも死んでない」マーベンはそっとくり返した。
「病気は、終わったの」母さんが言った。「そうして、うちの息子がやっと帰って来たわ！」

つくることだということです。そして集められた記憶を誰もが利用できる共有の財産にしていけば「地球の文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ることができる」と述べています。

この絵本は、ユダヤ民族の、ある家族の記憶の物語です。父親が語る物語を聞いて育った娘は、父の記憶を自分の記憶としても定着を果たしています。

私には、父の記憶を大切に保持する子どもものあり方が、何とも温かく、ユダヤの家族文化のきらめく財宝を垣間見たような驚きを感じました。そして、このような美しい絵本として形が誕生した時、地球上の私達すべての記憶として共有されることを、しみじみと実感するのです。

(舞々同人)